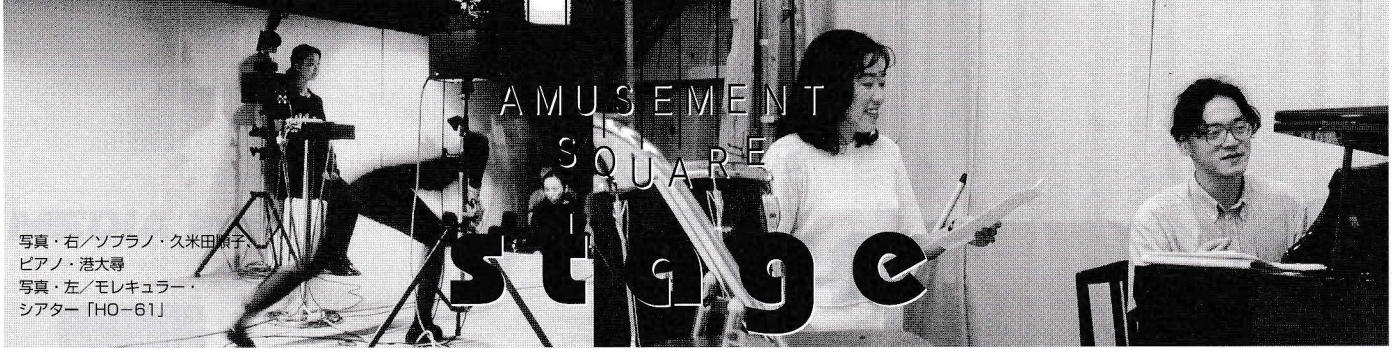

写真・右／ソプラノ・久米田順子
ピアノ・港大尋
写真・左／モレキュラー・
シアター「HO−61」

（1）

にわかに翳った空から次々と沸いてくる凍りついた雷鳴の楔なのか、異様に明るい麦畑から逆光めいて飛び立った金色の痂皮なのか。それとも空／夜／北の孤絶と麦畑／白昼／南の狂喜という、二つのマッス＝色塊が迫めぎあう地平線を鉤裂きにした何羽もの青黒いパサージュ＝切片なのだろうか。

ヴァン・ゴッホ一八九〇年の遺作『烏の群れ飛ぶ麦畑』。これがモレキュラー新作公演の弾爪である。縦50センチ横1メートルの横長の寸法は以前から気に入っていて、昨夏の現像劇『HO−58』で用いた印画紙もこのサイズだった。実物は図版とは大違いで、まずトワール＝画布がギラギラしているのに驚かされる。画家の死を予告せずにはおかない不穏にして大胆な構図を埋め尽くす、荒々しくも放埒なタッシュ＝筆触を間近に見ると、ことごとく透徹した神経繊維で鍛造されたとしか思えぬ超合金のプラージュ＝光面だからであろう。そこにコンマ・ダッシュ・コロン・アポストロフィの描法を見抜いたのは他ならぬアルトーであった。そして今回の我々のメインテーマ『カタカナのハに濁点を打つ』もまた、耳骨にダッシュをかけタッシュを奪取する壮大なオペラシオン＝実験と言っていい。

（2）

モレキュラーは今年6月広尾のヴェリタで、7月埼玉県立近代美術館で、8月水道橋のアテネフランセで好評を博したが、地元八戸では昨夏以来、来たる11月29・30日『HO−61／62』の新作二頭立てが実に久方ぶりの公演となる。見どころの第一は、詩人吉増剛造が二度の来八で書き起こした四篇の新作詩をどう舞台化しえたかにかかっている。第二は今夏に続いて再来八する作曲家港大尋とオペラ声楽家久米田順子に、ハングルの語り手キム・ビョンヨルと日本語朗読の長尾広海を加えた新しいセッション。もちろん杉本由貴子・工藤薫・田中裕子・高橋陽子・田島千征・服部明子・大向真理子・大久保一恵ら出演者が、会場のダンス・バレエ・リセに「ゴーストリー＝幽霊的」な時空間「死地ならね巴地」を起ちあげてくれるはずだ。八戸の八はメビウス状にうねる巴形だと告えてくれたのも吉増剛造である。

（3）

現像劇『HO−62』が「ヤキの演劇」だとすれば、撮影劇『HO−61』は「トリの演劇」である。今世紀最後の、とりもなおさず来世紀最初の演劇が、ヤキのまわった命トリの演劇なのか、それとも20世紀演劇史にヤキを入れ、ゴッホの遺作同様、南の死地にあって北の死地をトリにいく演劇なのか、そこが第三の見どころだろう。

ベケット『ワーストワード・ホー＝最悪の方へ』にはスティル・ディム・スティル・オン＝まだ微光まだまだ微光という一節があるように、これは烏の目による眺望であり、しかもトリ目の照星で写真を撮りまくれ＝スティル・オンという苛酷な試練なのだ。『神の裁きと訣別するため』と『ヴァン・ゴッホ／社会が自殺させた者』という二つの遺作をもつアルトーからの引用はどうか。『大洪水』や『狩猟』の「甘美な遠近法」で知られるルネッサンス前期の、イタリア語で鳥を意味する名の画工ウッチェッロをめぐる断章と、事実はどうあれ画竜点睛さながら、銃弾を腹にぶちこんだままあの麦畑に黒い烏の群れを描き入れたというゴッホをめぐる断章。

（4）

だから「トリ」かと目鯨立てられても喪に服している紙数はない。なぜなら、その一行一行が遺作であるほかはない詩人吉増がすでにこう書いているからだ。「止離たちも鯨もメロディによってしばらく生きて行く。」この止離こそアルトー／ゴッホの烏ではないか。その上、「私にはからすたちの翼が大地のはるか上で、激しくシンバルを打つ音がきこえる。」／「それら（沈黙・線・石・燐光）は私の頭の牧場のなかで、ただひとつの暗黒のシラブルから成る語を形作る。」（いずれも粟津則雄訳）この「シンバル＝シラブル」こそ吉増／武満のメロディなるものではなかったか。

『HO−61』のほうに上演される吉増の詩行「真夏の中庭の鳥は、濃淡を啄んでいて、それが〝鳥のゆめ〟であったかも知れなかった」がその消息を物語っている。

（5）

現代芸術のカタストロフィスト＝破壊分子ではなく「アポストロフィスト＝消息子」たらんとすれば、演劇であれダンス・オペラであれ、おのずと最悪の方へ赴かなくてはならない。最悪のHOこそゴッホの遺作とアルトー／吉増の遺作が息を殺して切り結ぶ「極北の死地」なのだ。というのも、ベケットの遺作『スブルソー』がビクッとした一度きりの体動、起立したままの死後硬直をさすからである。その英訳「スターリング・スティル＝まだもぞもぞ」を私訳すれば「総毛だつ停止／殺気だつ写真」となる。HO連作のテーマが「写真と演劇のパサージュ＝間道」であったことを想起しよう。↘

間道を往く者が間者であり、間者にとって間道は最悪の死地そして極北の巴地なのだから。

■**日時**　11月29日（土）開演PM7時30分～8時45分
11月30日（日）開演PM5時～6時15分（終演後PM6時15分～7時にコロックあり）

■**入場料**　学生1500円・大人2000円

■**主催・問合わせ**　☎0178−45−9247（高沢利栄）

モレキュラー「HO−61／62」公演に向けて
カタカナのハに濁点を打ってみろ!!

∧文／演出家・豊島　重之∨

11月のFriday Amusement Negative Shop

料金¥500　19：30～
問スペースペン
柏崎1−11−8　☎43−9876

■7日　未定

■14日　タイトル未定
脚本・演出／紫葉実
主演／紫葉実ほか

■21日　未定

■28日「……！」
構成・出演／安達良春

☞FANS番外編
■30日（日）
「DANCE　WAG公演」
ジャズダンス公演
構成・演出／沼尾美也子
出演／沼尾美也子、田中貴恵子、小笠原悦子、中村真紀子、橋本たか子、木村朝子、浅坂忍